

タイ国日本語教育研究会の歩みと過去の資料 —過去 20 年間の資料編纂を担当して—

齋藤正雄

1. はじめに

本稿においては「タイ国日本語教育研究会」(以下「研究会」と省略する)の歩みを振り返るとともに、研究会に残された諸資料の中の「年次セミナー」資料を紹介したい。

研究会は 1988 年に設立され⁽¹⁾、今年で 22 年目を迎えた。研究会はこれまでに様々な活動を行ってきたが、その活動の中心は定期的に行われる「月例会」と年に一度行われる「年次セミナー」であった。研究会の活動の記録はホームページ⁽²⁾で閲覧できる。しかし、いつ何をしたかという記録は残っているが、発表者が作成したレジュメ等の配布資料の多くはこれまで書庫に収納されたままの状態であった。諸般の事情により研究会の所蔵する諸資料を可能な限りコンパクトな形にする必要が生じ、2008 年 9 月より筆者は研究会運営委員として資料の整理作業と資料の散逸を防ぐための製本作業を行った⁽³⁾。

2. 研究会の沿革

2.1 研究会発足以前の状況

研究会発足以前の 1970 年代から 1980 年代にかけてのタイ国の社会状況ならびに日本教育を概観するとおおよそ次のようになる。

1969 年に在タイ日本国大使館広報文化センター日本語学校日本語講座が開講された。1970 年代に入ると田中首相訪タイの際の日本製品不買運動に象徴されるような急激な日本企業のタイ進出に対する反発もあったが、日本語教育は質量ともに拡大した。泰日経済技術振興協会付属語学学校が開設されたり、タイの各地の大学に日本語コースが開設されたりし始めたのもこの時代であった。一方、日本側にあつては 1972 年には国際交流基金が設立され、日本語教育の専門家を多数派遣しタイの日本語教育を支えた。ところで、1970 年代から 1980 年代にかけてはベトナム戦争に象徴されるように共産化の波がタイを襲った時代でもあり、ロシア語、中国語に比べて日本語は受け入れやすい土壌があつた⁽⁴⁾。

1980 年代のタイはプレーム政権体制となり政治的には安定していたが、経済的には不況で厳しい状況であった。しかし、85 年のプラザ合意以降、日本の強い円は多くの日本企業をタイへと押し出した。結果としてタイ経済を活況に導くとともに日本語教育を強く牽引し、空前の「日本語ブーム」をもたらした。この時代は日本語が後期中等教育における正式科目となったり、日本語能力試験が開始されたりした。また、引き続き全国各地の大学に日本語コースが設置されるばかりでなく、多数の私的な日本語学校や私塾が生まれた。

上述のように1970年代、80年代は日本語教育が盛んになった時代であり、日本政府から数多くの日本語教育の専門家がタイに派遣され日本語教育の基盤を作って行った時代であった⁽⁵⁾。

2.2 「日本語研究サークル」時代（1988年～1990年）

研究会は1990年に発足したが、その前身は「日本語研究サークル」である。中島清氏の「発足の経緯」（1990年2月）によれば、1987年12月に石井陽子氏（当時大使館文化センター日本語学校所属）と中島清氏（当時泰日経済技術振興協会付属語学学校所属）によってタイにおける日本語教育の勉強会を「サークル」の形で運営することが発案された。その後、1988年1月に「サークル発足のための準備会議」が泰日経済技術振興協会で開催された⁽⁶⁾。同年2月正式にサークルの活動が開始の案内が出され、1988年2月21日に記念すべき第1回月例会が開始された。また、1989年3月には第1回「年次セミナー」が開催され今日の基礎が作られたのである。「サークル」設立時の趣旨はタイ人日本語教師への学習、研鑽の場の提供にあった⁽⁷⁾。しかし1990年には日本人も参加できる会とし、「タイ国日本語教育研究会」に名称が変更され今日に至っている。

2.3 研究会の沿革（1990年～現在）

以下、1990年から現在にいたる研究会の沿革を概観してみたい⁽⁸⁾。

1988年、研究会の前身の「日本語教育サークル」設立（事務局は在タイ国日本大使館付属日本語学校および泰日経済技術振興協会付属語学学校におかれ、以後1994年まで月例会、年次セミナーを泰日経済技術振興協会で開催）

1988年2月、月例会（第1回）が開始され現在に至る

1989年3月、年次セミナー（第1回）が開始され現在に至る

1990年、現在の「タイ国日本語教育研究会」に名称が変更

1991年、国際交流基金バンコク日本語センター開設

1992年、国際交流基金バンコク日本文化センター開設、日本語センターが統合される

1993年、研究会の事務局がバンコク日本文化センターに置かれる

1994年、この年から月例会、年次セミナーが国際交流基金バンコク日本文化センターで開催され現在に至る

1999年、研究会ホームページ開設

2002年、会報の発行再開。JTAT（タイ日本語教師会）発足。

2009年、シーナカリンウイロート大学付属高校で年次セミナーが開催（会場の都合で分科会は開催されず）

以上が研究会の沿革であるが、研究会は発足以来、毎月の会合並びに研究発表の場である「月例会」、年に一度の大きな集まりである「年次セミナー」、さらに情報提供としての会誌の発行、ホームページの運営等をおこなってきた。

3. 研究会の資料

3.1 月例会資料

研究会の月例会に関しては、研究会のホームページ上で1988年から今日までの活動内容や研究発表テーマは閲覧できる。また、2005年以降のものに関しては発表者のレジュメ等の資料も一部閲覧可能である。この月例会の資料に関しては「タイ国日本語教育研究会18年の変遷と現在の活動報告」の中の「研究例会発表の傾向」に詳しい。それによれば「90年代半ばまでは日本語及び日タイ対照に関するテーマが多い」が、当時は「日本語教育の専門家は少なく、何よりも日本語にかかわる知識そのものを充実させることを参加者が求めている」しかし、「最近はどのカテゴリーに偏らず、またどこに分類したらいいのか判断しかねる多様さが特徴である。」と述べられている。この傾向は次に述べる「年次セミナー」資料に関しても同様のことが言える。

3.2 年次セミナー資料

3.2.1 年次セミナー資料の概要と保存状況

研究会「年次セミナー」は1989年に第1回が開催されてから2009年まで21回途切れることなく続けられてきた。その内容や資料の保存状況は別添【資料「タイ国日本語教育研究会「年次セミナー」の概要」】の通りである。表には年次セミナーの分科会発表テーマ並びにシンポジウム、講演のテーマと資料の保存状況を記した。また、当時のタイの日本語教育界で盛んに用いられていた言葉を「キーワード」として付し、当時の世相を加えた。

「年次セミナー」の発表テーマ、発表者等はタイ国日本語教育研究会のホームページで閲覧できる。また、2005年以降の資料に関しては一部検索できる。しかし、コンピュータが普及していなかった時代のものは「発表タイトル」のみであり、発表時のレジュメ等の配布資料を閲覧することはできない。今回の資料編纂作業の結果、一部既に散逸してしまった資料はあったもののほとんどの資料を収集整理できたのは大きな成果であったと言える。

3.2.2 「年次セミナー」における発表テーマの変化

設立から1990年代後半までの約10年間はタイにおける日本語教師への専門知識と教授技術の紹介と啓蒙が研究会の大きな役割であった。また、研究会には日本から派遣された日本語教育の専門家が多数参加しておりタイの日本語教育界の要望に応じることも容易な時代であった。

生田（1992）は研究会発足間もない時代、タイ人日本語教師がどんな問題に直面しているかを述べている。まず、「文法に対する関心事は非常に高く、事前のアンケートでも指導上の困難点、教師自身の日本語運用上の問題点の筆頭に挙げられている。」次に、「教材教具の作成方法、タスク、ゲーム、ロールプレイ等の教室活動の方法、教授法、テストの作成、評価法、模擬授業等、具体的で即実践できるものに対する関心が非常に高い。」要するに、「参会者が求めているものは、アカデミックな知識ではなくて、すぐに教室で使える実践的な技術、方法であり、どのようにしたら分かりやすい授業ができるかということなのである。」としている。

現在と違いコンピュータもなく情報通信システムも限られた時代であった。研修会やセミナーで情報を得るため、配布される資料入手のため、遠路もいとわず参加しなければならない時代であった。

2000 年前後になると基礎的な情報が教師間にある程度行き渡り、情報通信システム、コンピュータ技術の普及発展により比較的容易に様々な情報が入手できるようになった。また、研究会以外にもいろいろな教師の集まりが持たれるようになった。そのため、単にセミナーで得られる知識や資料を目的にセミナーに参加する教師は少なくなってきた。一方で機関、地域ごとの様々な問題点や研究テーマが出てきて、自分たちの問題点をお互いに研究討議しあえる形態の「年次セミナー」が求められるようになった。そのため、「講義や実習」形式のものから「研究発表」形式のものが多くなった。

こうした変化の背景には機関数、学習者数の増加と多様さがあげられるであろう。2006 年の国際交流基金の調査によれば約 400 の機関、7 万人の学習者数と言われており、80 年代、90 年代とは桁違いな数字である。また、その内容もこれまでの大学や中等教育にとどまらず、インタナショナルスクールや日本人学校補習校や「継承語としての日本語教育」の視点からも取り組みがなされている⁽⁹⁾。また、地域に目を向けてみるとタイの各地に教師会ができており、それぞれの地域での取り組みがなされている。さらにタイ人日本語教師の会も活動を活発化させている⁽¹⁰⁾。

3.2.3 年次セミナー資料の活用

以上、年次セミナー資料について述べたが、記録の蓄積ということは重要なことだと考える。幸いタイにおいては本国際交流基金「紀要」ならびにその前身となった「センター紀要」があり、非常に役立っている。研究会の諸資料も積極的に活用されることが望まれる。以下筆者個人の提言を述べたい。

まず、資料保存と公開の問題がある。研究会の「(学術資料編) 月例会・年次セミナー」資料は A4 サイズで 20 分冊である。量が多いためその保管場所の確保が問題となる。現在の研究会は事務局がなく個人が一時的に保管しなければならない状態にある。そのため、もし閲覧希望者がいてもその対応は難しい。なんとか適当な保管場所を確保し、閲覧システムを確立する必要がある。将来的には研究会のホームページ上で閲覧が可能になれば一番いいことである。そのためには様々な作業を必要とするが、なんとか実現させたいと考える。

また、「タイの日本語教育を考える会」のような日本においてタイの日本語教育に関心を向けてくださる関係者との連携を取り、お互いに資料の活用方法を考えて行く必要があるだろう。タイ国内のみならず、日本でも活用できるようになれば素晴らしいことである。

4. おわりに

「温故知新」という言葉があるが、「古いものをたずね、そこから現在の問題点の解決の糸口を見

出す」ということは大切なことだと思う。現在のタイの日本語教育には問題が山積しており、誰もがその解決に取り組んでいる。しかし、翻って考えてみるにいつの時代も問題がなかった時代があるのであろうか。いつの時代もその時代なりの問題があったはずだし、これからもそれは変わらないだろう。そう考えた時、諸先輩の残してくれた資料は実に貴重なものである。私たちは一度謙虚に過去の資料を紐解いてみるといいと思う。私たちが解決しようとしている問題は、またその解決の糸口は、もう既になんらかの形で提出されているかもしれない。今回ここに紹介した研究会資料を活用することは今を生きる私たちのため有益なものであり、かつてこの道を歩まれた諸先輩の業績を顕彰することにもなる。また、今を生きる私たちもできる限り多くの記録を残し、いつかこの道を歩まれる後輩諸氏に伝えたいと考える。

尚、本稿は筆者個人の見解でありその文責は筆者個人にあることを申し添える。

最後になりますが、資料編纂作業の過程で国際交流基金バンコク日本文化センターの大竹啓司先生に大変お世話になりました。また、国際交流基金日本語国際センターの三原龍志先生、タイにおける母語継承語としての日本語教育研究会の深澤伸子先生よりご教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

注

- (1) タイ国日本語教育研究会の前身は「日本語研究サークル」であり、1988年発足した。
- (2) http://www.geocities.jp/thai_nihongo/
- (3) 2010年3月現在、「(学術資料編) 月例会・年次セミナー資料」20分冊、「(事務資料編) 名簿及び事務資料」17分冊がある。いずれの資料も年度ごとに通し番号を付し製本した。
- (4) 末廣昭 (1993)
- (5) 日本政府 (国際交流基金) よりの日本語教育専門家派遣については佐久間勝彦 (1999) に詳しい。在タイ国日本大使館広報文センター附属日本語学校については大竹啓司氏作成の「資料在タイ国日本大使館広報文センター附属日本語学校の沿革」に詳しい。
http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/thailand.html#KYOSHI_KAI
- (6) 「発足の経緯」(1990年2月)によれば、日本語研究サークルの発起人は下記の通りである。
(敬称略、所属は当時のもの：筆者注) 石井陽子・門沢健也 (日本大使館) 村尾佐和子 (タイ商工会議所大学)、北村武士 (チュラロンコン大学)、福田紀子 (カセサート大学) 中島清・ブラパーセントーンスク (泰日経済技術振興協会)
- (7) 1988年2月1日付けでタイ人の日本語の先生方へ向けて「日本語研究サークル」(仮称)へのお誘いが出された。そこには「このたび、私たちの間で、タイ人の日本語の先生と日本語研究サークルをつくろうという話がまとまりました。(中略) 皆で気軽に話し合えるなごやかな

サークルにしていきたいと思いますので、皆さんお誘い合わせの上、ぜひ参加してください。」

とあり、1988年2月21日に「第1回例会」が開催される旨が記されている。

(8)「タイ国日本語教育研究会 18 年の変遷と現在の活動報告」を参考に筆者作成

(9)「第1回在外子女教育東南アジアセミナー--東南アジアにおける在外子女教育と継承日本語教育-」(2009年3月15日 タイ国、バンコク) 発表資料、

(10)『タウン』(2009年6月第48号) 国際交流基金日本文化センター日本語部ニュース

参考文献

生田守 (1992)「バンコック日本語センターにおける教員研修プログラムの開発」『世界の日本語教育』第2号、国際交流基金日本語国際センター、pp.77-94

ウォラウト・チラソンバット・北村武士 (1996)「タイにおける日本語教育」『日本語教育事情報告編 世界の日本語教育』第4号、国際交流基金日本語国際センター、pp.13-27

国際交流基金日本語国際センター『日本語教育通信』5号 (1991年11月)

齋藤正雄 (2008)「タイ国日本語教育小史」『日本語教育紀要』第5号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp.175-184

末廣昭 (1993)『タイ 開発と民主主義』岩波新書

末廣昭 (2009)『タイ 中進国の模索』岩波新書

佐久間勝彦 (1999)「海外で教える日本人日本語教師をめぐる現状と課題—タイでの聞き取り調査を中心に—」『日本語教育事情報告編 世界の日本語教育』第5号 国際交流基金日本語国際センター、pp.79-107

櫻井義秀 (2005)『東北タイの開発と文化再編』(北海道大学大学院文学研究科 研究叢書8)、北海道大学図書刊行会

深澤伸子・中井雅也・高橋宏典・大谷世津子 (2006)「タイ国日本語教育研究会 18 年の変遷と現在の活動報告」『日本語教育紀要』第3号、国際交流基金バンコク日本文化センター、pp.191-200

松井嘉和・北村武士・ウォーラウト・チラソンバット (1999 年)『タイにおける日本語教育—その基盤と生成と発展—』錦正社

タイ国日本語教育研究会 <http://www.geocities.jp/thai_nihongo/>

【資料】タイ国日本語教育研究会「年次セミナー」の概要

講演・分科会のテーマと資料の状況	キーワードと世相
1988 年度 分科会：①「助詞とその教授法」②「副詞とその教授法」	キーワード：教授法と視聴覚教材の利用方法 (日本) 竹下内閣

③「文型とその教授法」④「視聴覚教材とその利用法」 (資料保存状況：全て揃っている)	
1989 年度 分科会：①「日本語教育の基礎知識」(音声指導、日本語の表記、動詞、初級の助詞)②「日本語教授法の基礎と実践」(コースデザイン、教科書について、文法の理解と整理、教材・教具導入法と練習法、教案)③「類似語彙・表現・文型の意味用法と教授法」④「タイ人学習者の誤用例の分析と教授法」 (資料保存状況：全て揃っている)	キーワード：基礎知識、教授法、文型、意味用法、誤用例 (日本) 海部内閣、消費税、昭和天皇崩御 国際交流基金日本語国際センター
1990 年度 分科会：①「日本語教授法の基礎と実践」(タイ人対象) ②「日本語教授法の基礎と実践」(日本人対象) ③「初級授業における教具の利用法」④「日本語教育の諸問題」(作文教育、日本語・タイ語対照研究、ビジネス日本語) (資料保存状況：全て揃っている)	キーワード：基礎知識、教授法と教材教具、日本語教育(四技能)、ビジネス日本語 (日本) 海部内閣、バブル崩壊 『新日本語の基礎』(海外技術者研修協会)
1991 年度 分科会：①「日本語初級教授法と問題」(文法・発音・語彙)(タイ人対象) ②「日本語教育の基礎知識と文型・表現・語彙の意味用法」③「音声指導について」「書き」指導について④「日本語文法の諸相」(「使役」「条件と・ば・たら・なら」)(資料保存状況：③の一部欠如)	キーワード：基礎知識、教授法と教材教具、音声指導、日本語・対照研究 (日本) 海部・宮沢内閣、天皇訪タイ、湾岸戦争 (タイ) アーナン政権 国際交流基金バンコクセンター開設
1992 年度 分科会：①「初級文法 - 文型定着のための指導例」②「会話 - 発話を促す教室活動と実践報告」③「中上級の読解」④「異文化間コミュニケーション」 (資料保存状況：全て揃っている)	キーワード：基礎知識、教授法と教材教具、日本語教育(中上級)、ビジネス日本語、異文化間コミュニケーション、高校での日本語 (タイ) 国王調停(スンダー・チャムン和解) 国家教育開発計画改定(外国語重視施策) 現職中等学校日本語教員研修開始
1993 年度 分科会：①「初級文法 - 接続とやりもらいの表現の指導について」(タイ人対象)②「業の実際」「授業を見て、授業を考える」③「ビデオ教材の開発」④「文法」 (資料保存状況：全て揃っている)	キーワード：教授法と教材教具、実際の授業(模擬授業)、日本語教育(文法教育)、ビデオ開発 (タイ) チュワン連立政権、第2高速道路 『ガイドの日本語』(TPA)

1994 年度 分科会：①「異文化接触と日本語教育」②「初級クラスにおける教室活動」③「音声」「初級文法の格助詞 — 初級日本語教科書に出現する格助詞の種類、および用法説」④「会話における談話の型の考察」 （資料保存状況：全て揃っている。また、各分科会での別添配布資料もある。）	キーワード：教授法と教材教具、教室活動、タイ人を対象とした音声、コンピュータの活用、異文化接触 （日本）村山内閣、松本サリン事件 （タイ）タイ・ラオス友好橋建設 現職中等学校日本語教師養成講座開始
1995 年度 【基調報告】 「タイにおける日本語教育」 分科会：①「文字指導」②「音声」③「会話の授業について考える — タイ人学習者の場合 — 」④「高校の日本語教育を考える」 （資料保存状況：基調報告並びに分科会全て揃っている）	キーワード：大局的歴史的視点「タイにおける日本語教育」、文字、音声、会話、高校における日本語教育 （日本）阪神大震災 （タイ）テレビ日本語講座放映、「北部タイ日本語教師会」、「ビジネス日本語」（堂裏） 「ジェトロ日本語能力テスト」開始
1996 年度 分科会：①「初級指導の基礎技術絵と体を使って」②「社会人の指導法—コースデザインを中心として— 」③「誤用の謎解き」④「日本人ゲストを迎えての学習活動」 （資料保存状況：全て揃っている）	キーワード：基礎知識、社会人教育、ビジターセッション、誤用研究（この年「観光日本語」が話題となる、教育省教員養成局） （日本）橋本内閣 （タイ）国王在位 50 周年記念、チャワリット政権発足
1997 年度 【シンポジウム】①「研究会 10 年のあゆみ」②「タイにおける日本語教育の現状と将来の展望」 分科会のテーマ：①「音声」②「実習：初中級の作文指導」③「読解」④「学習者の発話を促す教室活動」⑤「歌を利用した学習活動」（資料保存状況：全て揃っている）	キーワード：10 年の歩み、現状と課題、音声、作文指導、読解、自発性 （日本）橋本内閣、山一證券経営破綻 （タイ）アジア金融危機 タマサート大学修士課程開始
1998 年度 分科会：①「文法（日本語の終助詞）」②「タイ語の日本語表記法 — 人名・地名など — 」③「文レベルの音声指導を考える」④「実験日本語教室 — 異文化/表現/イマジネーション — 」⑤「教員養成プロジェクトにおけるボランティア活動」⑥「様々な機関におけるボランティアの活動」⑦	キーワード：文法（終助詞）、文レベルの音声指導、ボランティア、高校での日本語教育 タイ語のかたかな表記の問題、多様化の時代 （日本）小渕内閣、長野オリンピック （タイ）バンコクにてアジア大会開催 タイラックタイ党設立（タッグシ）

「高校における日本語教育 1 ー概況ー」⑧「高校における日本語教育 2 ータイの高校における日本人教師ー」 (資料保存状況：全て揃っている。②、⑦の別添配布資料もある)	日本語が大学入試科目に加わる 海外での日本語学習者 210 万人をこえる
1999 年度 分科会：①「動詞の意志性」②「タイ語母語学習者のためのプロソディ優先の発音指導」③「動詞活用形のアクセント」④「漢字の覚え方 ー学習者の立場からー」 【ポスターセッション】11 項目の発表 (資料保存状況：全て揃っている。しかし「ポスターセッション」資料なし。当日様子は「泰国日本語教育研究会会報」第 3 号 2004 年 4 月に詳しい)	キーワード：文法（動詞）、音声指導（プロソディ）アクセント、漢字ポスターセッションにみられる各地の教師会、教材開発 (日本) 小淵内閣、雪印乳業食中毒事件 (タイ) BTS 開通
2000 年度 分科会：①「タイ人と日本人の互いのものの考え方の違い」②「タスク中心のクラス指導」③「大学のカリキュラム」④「ラチャパットのカリキュラム・徹底検証」 【ポスターセッション】7 項目の発表 (資料保存状況：①②③の資料なし。「ポスターセッション」資料なし。)	キーワード：文化（タイ人と日本人のものものの考え方の違い）、タスク中心、カリキュラム 教材開発、教師会、ボランティア団体 (日本) 森内閣、シドニーオリンピック (タイ) 小淵総理訪タイ
2001 年度 【講演】1)「海外での日本語教育の課題」2)「日本人の集団性 ー伝統社会から現代社会へー」 分科会：「音と意味の有縁性に関する一考察」「タイの教育機関における翻訳・通訳授業の現状と展望」「高校での実践報告」「科学技術者向けの日本語基礎会話のカリキュラム及び教材の開発」 (資料保存状況：講演 1) のみで他の資料は一切なし。)	年次セミナーはこの年から午前講演、午後分科会の形式になって行く。啓蒙、実用と言うよりも研究、応用的な側面が強くなる。 (日本) 小泉内閣、同時多発テロ (タイ)「タイラックタイ党」の勝利、タックシン政権
2002 年度 【シンポジウム】「大学は今何をめざすのかー日本語教育、大学での取り組み」 分科会：17 項目の発表 (資料保存状況：分科会「動詞の教え方」資料なし)	キーワード：大学での日本語教育（シラバス、カリキュラム）この頃より教育現場の多様化にともなって分科会の発表は多様化していく。 (日本) 小泉総理訪タイ (タイ) タイ政府の歴史的省庁再編成

2003 年度 【シンポジウム】①「活字文化としての日本ポップカルチャー」—教育現場での活かし方、動機付けツールとして— ②『リソース』の観点から授業を考える—学習者は何を使って学習しているか— 分科会：15 項目の発表 (資料保存状況：①なし。5 分科会資料なし。)	キーワード：ポップカルチャー、リソース (日本) 小泉内閣、日本郵政公社 (タイ) 国王のタックシン政権批判 チュラロンコーン大学が受験を日本語既習者のみのに限定
2004 年度 【シンポジウム】「ビジネスで使う日本語を考える」—企業と教育現場の視点から— 分科会：13 項目の発表 (資料保存状況：3 分科会資料なし)	(日本) 小泉内閣、新潟中越地震 (タイ) 地下鉄開通、鳥インフルエンザ コンケン大学教育学部に日本語教育主専攻学科が設置される、『あきこともだち』が完成
2005 年度 【シンポジウム】「動機について考える」—ドラえもんから日本語エキスパー— 分科会：15 項目の発表 (資料保存状況：3 分科会資料なし)	(日本) 小泉内閣、福知山線脱線事故 (タイ) 第 2 次タックシン政権 南部 3 件ヘテロ非常事態宣言 (タックシン政権への批判が高まる)
2006 年度 【シンポジウム】「タイと近隣諸国の日本語教育」—タイ・カンボジア・ベトナム・マレーシア・ラオスからの報告— 分科会：14 項目の発表 (資料保存状況：予稿集あり。3 分科会資料なし。)	(日本) 安倍内閣、WBC (世界野球) で日本チーム優勝 (王 Japan) (タイ) 国王在位 60 周年記念、泰日工業大学創立 クーデターによりタックシン追放 海外の日本語学習者数 298 万人
2007 年度 【講演】①「タイの日本語教育の総括と今後の展望」②「グローバル時代における新しい日本語教育」 分科会：25 項目の発表 (資料保存状況：予稿集あり。2 分科会資料なし。)	(日本) 福田内閣、年金記録問題 (タイ) 南タイのテロ事件 裁判所「タイラックタイ党」解党命令
2008 年度 【講演】タイ人教師の本音？ 日本人教師との協働について 【ワークショップ】協働の学びをデザインする 【ポスターセッション】5 項目の発表 尚、2008 年度は会場の都合で分科会を開催することができなかった。(資料保存状況：全て揃っている)	キーワード：協働 (日本) 麻生内閣、秋葉原通り魔殺傷事件 (タイ) サムット政権、ソムチャイ政権 PAD の国際空港占拠事件

(注：研究会ホームページ並びに原資料より筆者作成)